
罪人の島

神竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪人の島

【Nコード】

N1745V

【作者名】

神竜

【あらすじ】

大学を退学させられた、主人公の小山優介。

突然の退学に腹を立てた優介は、同じ大学に通っていた高校時代の友、古木翔太を殺すことを決意した。翌日、彼にメールを送り待ち合わせの場所へ向かう…

プロローグ

辺りは明るい夜。俺は、公園で友を待っている。ブランコがあり、ジャングルジムがある、いたって平凡な公園である。辺りには、多くの街灯があり、奥には繁華街の明かりもある。俺はメールで

「六時に、灰色公園前に来てくれ。話したいことがある。」
という内容だ。一分が経ち、やっと彼は来た。可笑しな格好をしていた。黒い帽子をかぶり、サングラスをして、グローブを嵌めていた。服も黒いジャケットを着ていた。全身真っ黒である。彼とは、高校卒業以来、全く会っていなかった。しばらくの間、彼と並んで歩いていた。特に目立った会話はなく、ただ歩いているだけである。しかし、いきなり腕を掴まれ、建物の間に連れて行かれた。そこは薄暗く、ごみ箱が散乱している。ここで彼は何がしたいのだろうか？すると彼は、不意にジャケットの懐から、ナイフを取り出した。何をするのか、と考える暇もなく、俺はそこで殺された。高校時代の親友に…

建物の間で、深紅の液体が、辺りに飛び散った。辺りにあった、ごみ箱は真っ赤に染まっていく…
彼は倒れる。ナイフを捨て、刺した後、僕はその場から離れる。僕は、黒と赤の混じりあった闇の世界から、電気力で輝いている光の世界へと帰って行った。何事もなかったかのように…

誘拐

ピピピピ・ピピピピと、目覚まし時計の効果音が部屋中に響く。布団から手を伸ばし、目覚まし時計を止める。現在、午前六時半である。通常であれば、学校に行くために支度をする時刻だ。しかし、僕は大学には、行っていない。今は、無職である。とりあえず、目玉焼きを焼き、軽い朝食を取った後、布団をたたんだ。その後、パソコンを起動させた。立ち上がるまでの間、部屋の窓を開けた。部屋の窓は、全部で三個ある。寝室に一つ・居間に一つ・台所に一つだ。そういうしているうちに、パソコンが立ち上がった。最初にメールをチェックする。これは、いつもの癖である。すると、見覚えのないメールが一通来ていた。好奇心に駆られて、見てみた。

「 小山 優介 様

今回は、他でもない昨日のことです。優介様は、昨日殺人をなさいましたね？殺害した方は、親友の古木 翔太様ですね？本題に入ります。あなたをある場所に招待したい。

日時 六月 五日 正午

場所 会堂文化会館前

断れないはずですよ。では、当日に会えることを楽しみにしています。なお、返信してもこのアドレスは再使用する事はありません。

Z
L

僕はこれを見て絶句した。何故、昨日のことを知っている？誰も見ていなかったはずなのに…僕は、行かないといけないのだろうか？

僕は急いでカレンダーを確認した。今日は六月四日だ。つまり、明

日である。僕は、午前中、明日のことをじっくりと考えた。午後になり、とりあえず、バイトに行くことにした。

バイトといつても、近くのコンビニで働いているだけである。この辺りにはあまり人が住んでいないので、人はあまり来ない。だからとつても暇だ。

午後五時半になり、バイトが終了した。昨日、殺人を決行した時刻の三十分前である。この後、電車に乗るため、六時に集合なのだ。よく考えてみれば、「Z」と名乗る者は、僕のメールアドレスだけでなく住所や、交通手段も知っていることになる。会堂文化会館の近くに電車が付くのは、約午前十一時五十分なので、正午だと丁度良いのである。僕のことをここまで知っているとなると、少し気持ち悪くなる。そんなことを考えながら家に帰る。

家に着き、食事を済ませた後、再びメールをチェックした。今度は、新着メッセージはなかった。少し安心した。

男は、望遠鏡を片手に持ちながら、携帯電話を取り出した。優介の部屋がよく見える、ビルのある部屋の窓から、見ていた。

「もしもし。あ、はい。分かっております。」

片時も目を離しておりません。」
そう言つて男は黙る。

「優介は、平和に眠っています。」

あ、はい。

本当に平和なもので。一樣、ばれていません。では、今日の報告は終わらせていただきます。」

男は、携帯をポケットにしまい、煙草に火を付けた。

「また、見張りか。結構眠いんだよなあ。」

目覚ましが鳴り、この家で過ごす最後の日がやってきた。しかし、本人は、この事実を知らない。にもかかわらず、いつも同じように過ごしている。

現在、午前九時半。 残り、二時間半。

二時間後に、僕は駅に行き電車に乗る。何故か知らないが、妙にわくわくしてきた。

しかし、僕の他にこのような状況の人はいないのだろうか？

まあ、考えても仕方がない。そう思って、僕は仮眠を取った。目覚ましをセットしてから…

どうやら、彼は寝たようだ。のんきな奴だ。もしかしたら、わざとやっているのかもしれない。こっちの存在に気が付いているのか？そんな考えを繰り返し広げている途中で、中断した。携帯電話が鳴ったのだ。

「もしもし…」

男は、電話に出た。

「……、あ、はい。

……、分かっています。

ええ、そのことなら、言った通りにやりましたよ。いったい何がしたいのですか？

……、すみませんでした。後は、予定通りにやらせていただきます。」

男はそう言って、電話を切った。

目覚ましは鳴った。さつさと着替えて、家を出た。電車に乗り込んだ後、僕は、昼食を食べていないことに気が付いた。電車は、時刻表通りに着いた。僕は約束の時間に間に合わせる為、走り出した。

約束の時間の二分前に、会堂文化会館前に着いた。とりあえず、近くにあったベンチに座った。途中で昼食を買おうと思ったが、時間がおしていたため、諦めた。「Z」は、何故この場所にしたのだろうか？特徴といたら、近くに船着き場があるくらいだ。他の特徴は特にない。人が多く行き来しているわけでもない。そんなこと考えていると、約束の時間から五分が経った。すると、不意に後ろに人の気配を感じた。気が付いた時には、口に何か布の様な物が当てられていた。次第に気が遠のいていった。僕はいったいどうなるんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1745v/>

罪人の島

2011年10月9日00時26分発行